

令和元年度

事業所名： グループホーム アミーチ

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0391300100		
法人名	社会拭き私法人 共生会		
事業所名	グループホーム アミーチ		
所在地	〒028-6721 岩手県二戸市似鳥上平15-1-2		
自己評価作成日	年月日	評価結果市町村受理日	令和2年3月18日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

理念である「ひとりひとりの思いを大切に」を念頭に置き、利用者様・ご家族様の声を聞き、思いを実現できるように、努力を重ねている。天気の良い日には外出し景色を楽しんでもらい、気分転換が図れるように支援している。利用者様同士が自然な状態で、誰からともなく声を掛け合い、お互いを気遣っている様子が、とても優しい気持ちになる日々を送っている。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaijokensaku.mhw.go.jp/03/index.php?action=kouhyou_detail_022_kanitrue&JiyosyoCd=0391300100-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	---

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は、合併前の旧二戸市の西部に位置した静かな環境の集落の高台に位置し、敷地内には、法人が運営する特別養護老人ホームとデイサービスセンターもあり、相互の連携の下で運営されている。広域行政事務組合を保険者とし、利用者は地元二戸市と隣接する一戸町に跨り、一戸町の高等学校との交流もある。管理者のリーダーシップのもと、職員と利用者のコミュニケーションの出発点を職員の提案により「支援する側が理解され利用者を受け入れてもらうこと」とし、おしなべて自立度が高い利用者それぞれに役割を持っていただきながら、思いの汲み取りに工夫を凝らしている。職員は利用者を受け入れてもらっている安心感を覚えながら、モチベーション高く業務に従事している。運営方針に掲げる「安心して家と同じような暮らしが送れる生活環境」の下で、明るく、笑顔と会話が飛びかっている楽しいグループホームである。夜間想定避難訓練は、毎月1回行っている。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和元年12月2日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

[評価機関:特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会]

令和元年度

事業所名：グループホーム アミーチ

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	職員が共有できるように、苑内の見やすい場所に掲示し、いつでも意識できるようにしている。	「ひとりひとりの思いを大切に」を運営理念に掲げ、談話室の時計の脇に掲示し、また会議資料には必ず理念を印刷し、常に職員が意識出来るようにしている。理念のもとにある5項目の運営方針の中で、「安心して家と同じような暮らしが送れる生活環境づくり」を第一に、職員は、相互の心の交流を大切にしながら、利用者個々の能力を活かした支援に努めている。	理念は、平易な言葉で表現されているが、意味するところは深く、介護サービスの更なる向上を目指す上で、全職員が一堂に会し、短時間でも定期的に実践状況等を振り返る機会を設けることが望まれます。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	小学校の行事に積極的に参加し、交流が図れるようにしている。(地域の方々も参加されている)理容も地元の美容室を使う事により、地域交流の機会を作っている。	地域の小学校の運動会、学習発表会、三世代交流会や地域のお店での理美容は、地域の方々を利用者を理解する出合いの機会にもなっている。今年も地域の方から栗ご飯の差し入れを頂いている。福祉コースの生徒のご縁で、「万代館」での一戸高校の「縁日」には、利用者・職員全員で出かけるようにしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	小学校の行事に参加する事により、地域の方々との交流を通じて理解を深めてもらえるようにしている。市で行われている認知症を支える会に協力し、イベントの手伝いを行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	積極的なご意見・質問が出され、有意義な会議となっている。提案された事は実践できるように会議の議題として出す事によって共有できるようにして、実践に活かせるように努力している。	地区の複数の民生委員、行政、入居者家族に加え、事業所からは幹部職員の他に2名の職員も参加し、活発な意見交換が行われている。避難訓練に関する委員の助言を活かし、薄暮時に事業所独自の訓練を実施し、安全な避難経路に課題があることを把握した。また、市の部長が行政関係委員として毎回出席し、市内の状況について貴重な情報を教えて頂いている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	推進会議のメンバーとして会議に参加して頂いており、アクシデント等の報告も含めて行っている。その際には、管内での情報も頂き、事業運営に活かしている。	管理者は、要介護認定申請に限らず、ささいな用務でも市や広域行政事務組合に足を運び、指導を頂き又は情報交換に努め、市主催の「認知症を知る会」のお手伝いにも加わっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	定期的な確認を経て身体拘束をしない意識を高めている。夜間は防犯の為、施錠している。	職員は3ヵ月毎の身体拘束適正化委員会に可能な限り出席し、また全職員が輪番に主宰して研修を行うことにより、身体拘束適正化の徹底に努めている。スピーチロックの防止のために、繰り返し注意し合っている。利用者は、強い言葉を掛けられると表情を変える事が多く、その場合には、直ちに、管理者がその場の雰囲気を変える役割を果たしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされないよう注意を払い、防止に努めている	法人の施設内研修で学ぶ機会を設けている。又、2ヶ月に1度倫理委員の方々が来苑され、利用者の表情を見て頂き、会話を通じて聞き取りを行っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護や成年後見制度について学ぶ機会を設ける事は出来なかったが、利用者の方に成年後見人が付くことになり、不明な点があれば、職員それぞれが調べてりしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の際には、時間を掛けて説明するとともに、確認は必要な所は繰り返し説明し、納得いただけるようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ご家族様から意見・要望が聞かれることはほとんどない為、面会・通院時等の際には、必ず日常の様子を報告させて頂き、お便りや広報を通じて普段の様子を伝えられるようにしている。	家族からの意見や要望は殆どないが、来訪した際には、必ず意見・要望を伺うようにしている。家族意見の呼び水になることも期待して会報「アミーチ」を毎月郵送し、また「言えないことを書いて」とご意見箱を用意しているが、活用されたことはない。デイサービスのバスを利用して外出する機会が多いことから、来訪する家族のために、予めお知らせすることが大切としている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月開催している職員会議やアミーチ会議の中で、職員の意見を聞くようにしている。今年度は、職員満足度調査を実施して、職員の意見や要望を聞くように努めている。	会議の席に限らず、職員が様々な場面で管理者に意見・要望等を話せる職場風土がある。職員からは、利用者への対応に関する事項が多く提案され、管理者は、「まずやってみて」と提案の実践を促している。過日、施設長が担当し「日頃感じている事」などについて、「職員満足度調査」を実施したばかりである。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員の努力や実績、勤務状況を把握し、人事考課により職員の評価をしている。キャリアパスと人事考課との調整の中で、職員の処遇について改善できるよう検討中である。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内外の研修については、出来るだけ参加させるように努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	出来るだけ同業者との交流が出来るよう配慮している。この交流によってサービスの向上となる事を期待している。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前より、介護支援専門員から情報を頂くと共に、施設に来て頂いて見学をしたり、事前訪問でその方の様子を伺ったりしている。入所の際には環境に早く馴染めるように雰囲気作りに気を配っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所申し込みの際に、ご本人の状況を伺い、ご家族様からの聞き取りも行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ご本人が早く環境に慣れ、馴染む事が出来るように、利用者間の関係性に気を配り、自分の居場所、過ごし方が見つけられるようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	一緒に作業を行う事で、一人ひとりが出来る事の把握に努めている。出来ている事は現状をより長く維持し、共に生活を支え合うようにしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支えられる一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	通院の際には家族に対応してもらう事により、定期的に詳しい様子を報告できている。面会、外出の機会を作って下さるご家族様もあり、共に支え合うように支援している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	地元の利用者さんが増えたことで、小学校の行事参加の際には、懐かしみ、馴染みの関係が続けられている。その他の方々も外出の機会を通じて、近くに行ってみたりしている。近くの美容院は、以前より行きつけの方もおり、それ以外の方も利用させて頂き、馴染みの関係性を築いている。	地元の利用者が増えたことで、馴染みの方と会う機会が増えている。小学校の行事や理美容院に限らず、職員と一緒に買い物に出かける近くのスーパーでも馴染みの方に合うことが多く、会話が弾んでいる。昔からの友人も訪ねて来ている。隣接のデイサービス利用者の訪問はないが、散歩の際に窓越しに顔を合わせている。かつて住んでいた地域をドライブしても、年々、家の意識が薄くなってきている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	自然と声を掛け合い、穏やかな会話が弾んでいる。作業をする際には、お互いに声を掛け合い一緒にやっている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	特養への住み替えになった方もおり、特養の職員と情報交換を行っている。退所後も、次のサービスに繋がるように、介護支援専門員との情報共有に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人より要望等を話してくる方が殆どない為、日々の何気ない会話から、本人の思いを聞き出せるように配慮している。訴えがあった際には、しっかりと話を聞き、要望に応えられるものに対しては、対応を行っている。	言葉は出るが、利用者が自分の思いを語ってくれることは少ないが、何気ない会話から本人の思いに辿り着くこともある。管理者は、職員が利用者の側に寄り添い静かに手を擦ってあげるにつれ表情が変わることで、言葉にはならなくとも職員に語りかけ、自分の意志に沿ったか否かの直接的な反応がなくとも、満足げな笑顔を見せてくれるとしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所の際に、ご家族より家での様子の聞き取りを行い、入所後はその方との会話を大切に、多くの情報が得られるように努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	会話や表情・行動から、その時々々の気持ちや気分・体調の変化に気を配れるように配慮している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月の会議で話し合い、情報を共有し新たな課題に対応している。日々の変化については申し送り共有し、職員同士で意見を求め、変化に対応出来るようにしている。	計画作成担当者を兼ねる管理者のリーダーシップの下、日々の申し送りノートを基に毎月のカンファレンスで居室担当者の情報を中心に検討を繰り返し原則6か月毎に見直し、計画作成担当者に戻して作成している。家族の希望を含めて「安全に暮らしている事」を実践するための、現状に即した計画としている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日の記録をしっかりと行い、申し送りの際にも細かい所まで伝えられることによって、変化に順応に対応できるように配慮している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々々に生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	面会・外出等、事前に連絡をいただけるように関係作りを行い、柔軟にご家族様の要望に応えられるように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	週に1~2回の買物の際には、店員さんをはじめお客様にも温かく見守って頂き、時には声掛けに対しても優しく返していただいている。イベントの参加を通じ、理解と協力を得られている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入所前からのかかりつけ医を変更する事なく継続する事で関係性を築き続けている。その方の情報は、通院カードを通じて伝えられるような工夫もしている。	通院は、ほとんどの利用者が入居前からのかかりつけ医を家族の付き添いで受診しているが、家族が遠方の利用者には職員が同行している。生活状況やバイタルを記録した「通院カード」を家族に託し、適切な受診を支援している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	体調面で心配なことがあれば、併設の特養の看護師に報告・相談・助言をもらっている。入院時には退院後の支援も含め、家族と共にカンファレンスに参加している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院の際にはしっかり情報提供を行い、その後も面会する事で、その方の様子を伺いながら経過の情報を得るようにしている。そうすることで退院・退所の早めの対応に努め、その後のサービスにつなげられるようにしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末期の対応は行っていない。その為、日々の状態の変化は家族に報告するように努め、段階的な経過を理解して頂けるようにしている。併設特養への住み替えが上手く出来るように、家族・特養の相談員との情報共有に努めている。	入居時に家族に対し、特養を併設しており看取りを行っていないことを説明し、納得を頂いている。介護度3で特養入所の申し込みを促している。「歩行困難のため常時車椅子利用」を具体的な住み替えの目安としているため、事業所として、常時車椅子にならないように、立ち上がりの支援をしている。昨年度は3名の利用者が併設特養に住み替えしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時対応マニュアルを作成し、対応している。救命講習への参加も行い、学ぶ機会を設けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	地震や火災を想定して訓練を行っている。夕食後に夜間想定の実践を実施することも出来た。年2回は特養との合同訓練の行っている。	年2回の法人合同の訓練に加え、事業所独自に毎月夕食後に出火場所等を変えながら、夜間想定の実践訓練を実施している。その結果、行動がゆっくりになること、考えていた以上に足元が暗いことが明らかになっている。また、職員の参集に一定の時間を要することから、近傍に住む運営推進委員である民生委員の協力を仰ぐ必要があるとしている。事業所は土砂災害危険区域に指定されている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	その方にあった声掛けが出来るように気を配っている。声を掛ける時の状況・声の大きさなどにも配慮している。	職員の発案により、利用者を知る以上に、支援する側が理解され利用者に受け入れてもらうことをコミュニケーションの出発点としている。声の掛け方次第で、気分を損ねたり不穏の兆しがみられる方もおり「お手伝いして頂きたいのですが」とお願いするなどの工夫をしている。職員は利用者を受け入れてもらっている安心感を感じている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者様が声を掛けやすい雰囲気・環境作りに務めている。会話や動きから、その方の思いを見逃さないように気を配っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員から提案はするが、無理強いをする事なく、その方が思うように過ごしてもらえるように努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	季節に合った衣類・整容等への配慮にも気を配りつつ、衣類の乱れがないように、自分で出来ない方への気配りが行えるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	メニューに季節の物・旬の物を食材に使用し提供できるようにしている。買物・下ごしらえ・盛り付け・配膳等を一緒に行っている。夏には畑で収穫した野菜も使い食べている。	日曜を除く昼食は、併設の特養で調理している。その他の献立、調理は事業所で職員が行い、利用者は下膳は勿論、皮むきなども手伝っている。週に1、2回のスーパーでの買い出しには、多い時には5人もの利用者が出掛け、カートを押し職員と一緒に商品を選んでいる。一日がかりのドライブでは、好評のおにぎりや漬物を持参している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量や形態はその方々に合わせて提供している。水分がすすまない方には、数回に分けて対応したりと工夫をしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアを行っている。声掛け・見守り・仕上げ等、その方々に応じた対応を行い、清潔保持に努めている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	各自の排泄パターンの把握に努めている。排泄チェック表を使用し、時間ごとの誘導を行っている。下着・パット等の使用もその方々に合わせて対応している。	布パンツのみが3名、パット併用の布パンツ利用が1名、同じくりハビリパンツが5名となっており、全員がトイレを使用している。夜は7名が自分で起き、職員は居室のドアを開ける音で対応している。誘導は1名、残る1名は朝まで起きない。排泄自立の状況は総じて高い。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食事から排泄に繋がるように配慮し、運動も心掛けている。牛乳・乳酸飲料・センナ茶等、下剤を使用せず排便できるようにしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	希望時の対応は難しいが、他者との会話を楽しむ等、安心してリラックス出来る環境作りに務めている。	日曜を除く毎日お風呂を準備し、午前中の2時間程をかけ、週に2、3回の入浴としている。大き目の浴槽を備え気の合った利用者2、3名と一緒に入ることもあり、歌を唄ったり、たわいもないお喋りを楽しんでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中の活動により、夜しっかりした睡眠がとれるように配慮している。日中の休息は居室に限らず、和室や談話室等、その方々が好きな場所で出来るようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	お薬の説明書がすぐに見れるようにファイルしてある。変更があった際にはしっかりと申し送り、情報共有に努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	出来る事はもちろん、少し困難なことも他者と協力する事で出来るようになり、その方の自信につなげ、出来る事が増えるように努めている。出来る自信と喜びを次に繋げている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。 又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	希望は殆ど聞かれないが、買物外出をはじめ、各種イベントの見学や季節を感じてもらうためのドライブによく出掛けている。天候の良い日は散歩をして気分転換に努めている。ご家族と外出をする方もいる。	気候が良ければ、午後一番に全員で30分程度をかけて広い敷地内を散歩したり、時には予定外に市内を巡り、外出する機会を多く作っている。季節には、デイサービスのバスを借りて、道の駅や景勝地をドライブしている。運動を兼ねた事業所内の掃除は、園内の散歩に代わるばかりでなく、身体を動かすことを日課とすることで、利用者が生活する上での自信に繋がっている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	希望により、本人が現金を持つこともあるが、ほとんどの方は管理できない為、預かっている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	毎年、年賀状を一緒に作り送っている。自分で携帯電話を持って連絡を取り合っている方もいる。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	談話室からは中庭が見えて、畑や外の景色が四季折々楽しめる。	台所、事務室、小上がりと一体的に配置された広い談話室は、陽光が高い天井から隅々まで差し込んで明るい。太い梁には金田一温泉のゆるキャラを模した大きな作品が飾られ、掲示スペースにはカレンダーや利用者の作品が秩序だって掲示されている。炬燵が置かれた小上がりには、茶器や折り紙がすぐ取り出せるようにしまわれている。陽光と床暖房で冬でも快適に過ごせる談話室には、勿論異臭はない。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	好きな場所で、好きな事(テレビを観る・絵を描く・新聞を見る・会話をする)ができるように見守っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れたものを持参して頂き、自分らしく馴染みある空間作りを行っている方もいる。又、家族と撮った写真を飾ったり、本人の作った物を飾ったりして、居心地の良い場所作りに努めている。	清掃が行き届き清潔に保たれている居室には、ベッド、洗面台、大き目のクローゼットが備えられている。月が変わったばかりでも、壁の大きなカレンダーは、どの居室も一様に師走12月になっている。持ち込んだ小ダンスに家族写真やお気に入りの買物籠を飾るように置いている利用者もいる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	場所が分からな方への配慮として、貼り紙を活用している。		